

ヒルファディングのナチス経済論, 1933年半ば

倉 田 稔

目 次

はじめに

- 1 状況
- 2 「経済会議の挫折」
- 3 「悪化した財政」
- 4 「テュッセンは帝国を盗む」
- 5 「遅いテンポ」
- 6 「労働者に反対する戦い」

むすび

はじめに

本稿は、拙稿「ドイツを逃れるR・ヒルファディング、1933年前半」¹⁾の継続である。そこではすでに、ルードルフ・ヒルファディング(1877—1941)の3つの作品を扱った。「時代と課題」²⁾では、彼は、ナチズムが権力を掌握した前後の時期を、全面的に概括的に、批判した。「全体国家」と「財政上の帝国破壊」³⁾では、彼は、ナチの国家財政・自治体ナチの国家財政・自治体財政を

1) 『人文研究』第72しゅう、1986年9月。

2) この論説は、倉田・上条編訳『R・ヒルファディング現代資本主義論』(新評論)の中で訳出されている。

3) 前出拙稿¹⁾では、前者「全体国家」が紹介され、後者「財政上の帝国破壊」が訳出されている。そこでは後者の原名・出典をを記載していなかったので、ここで示しておく。

Finanzielle Reichszerstörung. in: *Neuer Vorwärts* [以下NVと略す], Nr. 4, 9.7.1933

吟味し、その批判をした。その二作品で彼は、ナチズムがインフレーションを起こさざるをえないという主論点を軸に、批判をしたのであった。

本稿では、ヒルファディングがドクトル・リヒャルト・ケルンという筆名で、亡命ドイツ社会民主党機関紙『ノイエル・フォルヴェルツ』に寄稿した諸論説をとりあげる。

1. 状況

ヒルファディングが亡命する1カ月前の姿を、ポール・M・スィーザーが紹介している⁵⁾。

「私〔＝ヒルファディングの友人〕は、ヒトラーが首相に任命された数日後、彼〔＝ヒルファディング〕と話し、労働組合がゼネラル・ストライキを呼びかける機が熟していると考えられるかどうかと、尋ねたことをはっきり思い出す。1933年2月の初めのその時でさえも、彼は気持ちよいゆったりとした椅子に座って居り、暖かいフェルトのスリッパを履いていた、そして、穏やかな微笑を浮かべて語った。私は若いとき、扇動家だったが、政治的老巧さというものは適切な瞬間を待ちかまかまえることにある、と。要するに、ヒルデンプルグがまだ大統領であり、政府は連立政府である。ヒトラーごときがうろうろしていても、ADGB〔＝ドイツ労働総同盟〕は、一時的な政治目的のためにその全存在を賭けてはならない組織である、と。すでにゲシュタポに追われていた友人の家に彼が隠れていたのは、それからほんの数日後のことであった。」

4) ヒルファディングは、少なくとも247の論説を同紙に寄せた。その目録は Minoru Kurata, Rudolf Hilferding. Bibliographie seiner Schriften, Artikel und Briefe. in: *Internationale Wissenschaftliche Korespondenz zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung* (Berlin), 10 Jg., Sep. 1974, Heft 3. (前掲『R. ヒルファディング現代資本主義論』巻末、にある。)

この諸論説の意義は、Alexander Stein, *Rudolf Hilferding und die deutsche Arbeiterbewegung*. Hamburg 1947 (邦訳) アレクサンダー・シュタイン『ヒルファディング伝』東京・成文社 1988年、に示されている。

5) 参考のために、繰り返しになるが前掲拙稿では、1句抜け落ちていたので、書き移す。

この点についてゴットシャルク教授は、論評する⁶⁾。1, 政治的な状況, 2, ヒルファディングの個人的な状況, である。

1, について, こう論ずる。失業者が7百万人も居る時代に, ゼネラル・ストライキは成功の見込みがなかった。武力闘争は, 問題になりえなかった。組織労働者は, 武装していなかった。国防軍は, ヒルデンプルグ〔大統領〕の下に, つまりそれと共にヒトラーの下にあった。彼〔=ヒトラー〕の下には, 極右翼の蔭の軍事団体があった。それゆえ, これは展望がなかったのである。こうして教授は, ヒルファディングを正当化している。

2, についてはこうである。「ヒルファディングの個人的状況は, スウィーギー⁷⁾が描くようには, 決して安楽ではなかった。……彼はベルリンで孤立していただけではなかった。カウツキーとの手紙のやりとりから見てとれるように, 危険でもあった。フレンケルが論じているが……ヒルファディングは, カフェ・ドゥミヒェンでの『ゲゼルシャフト』誌のベルリンの寄稿者の話し合いに, 参加しなかった。」

教授は, フレンケルを引用する。「彼〔=ヒルファディング〕は, 公然の店での会合に, 野卑な振舞いをされるといふ危険を冒さずには, 参加できなかった。『ゲゼルシャフト』誌が存続していた数年間に公表された個々人の寄稿作品に, 精神的緊張があったことを十分理解するためには, これらの常に増大する外からの圧迫を, 十分配慮しなければならない。」

ヒトラーが権力に就いてから⁸⁾, ヒルファディングは, ドイツ社会民主党幹部会の要請で, ドイツを出て, 国外へ去った。彼が, ナチに最も迫害される人だと思われたからである。その理由は, 彼が同党内左派で, 厳しくナチズムを批判していたからである。またユダヤ人であったからかもしれない。「1933年

6) Wilfried Gottschalch, Hilferdings Auseinandersetzung mit Faschismus und Stalinismus. (Manuscript) S.15-17 (これは, 同教授が1986年に来日した時の報告の1つである。)

7) 教授は, この手紙の書き手がスウィーギーだと思っているが, 実際は, 彼の友人である。

8) バディア『ヒトラーの前夜』新日本出版社

3月の終わりに、社会民主党の国会議員オットー・エガーシュテットは、デンマーク国境を越えて連れて行った。」⁹⁾

ドイツ・ファシズムが労働者運動を破滅してしまったことに、彼は特に気を落とした。考えられないようなテロルを振るったヒトラー独裁が、運動をほとんど根こそぎにした。だがヒルファディングは「大きな事柄では、偉大であった」。しばし落ち込んでいたが、また元の人になった。闘争心を持ち、活動好きで、新しい力が彼には湧いた。

彼は、この時代に二つのことに携わった。一つは、西欧諸国の社会主義政党と直接の結び付きを回復することであり、もう一つは、亡命ドイツ社会民主党の外国組織を創設するのに協力することであった。

ヒルファディングは、スイス・フランス・ベルギー・イギリスの指導的同志たちと連絡を取り、また種々の国際会議に参加した。

彼は、外国へ行ったドイツ社会民主党幹部会員たちと連絡をつけた。その人々はチェコスロヴァキアに本拠を置いていた。党指導部がプラハにあり、二人の幹部会員オットー・ヴェルスとハンス・フォーゲルが首脳であった。

党指導部は1933年6月から、週に1度『ノイエル・フォルヴェルツ』を発行した。¹⁰⁾

* * *

すでに述べたように、ヒルファディングは『ノイエル・フォルヴェルツ』に、「全体国家——全体の破産」を書いた。それは拙稿で扱われた。ついで「経営内の奴隷制」である。これは、翻訳が出たので、¹¹⁾ 省略したい。「財政上の帝国破壊」も拙稿で取り上げた。その次の「仮面を脱いだヒトラー」¹²⁾ も、翻訳されたので、省略したい。

9) 前掲シュタイン『ヒルファディング伝』成文社 59ページ

10) 同, 62ページ

11) Sklaverei in den Betrieben, in: NV. Nr. 3, 2. 7. 1933. 拙訳, ヒルファディング「経営内の奴隷制」(『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第4号 1988年7月, 所載)。

12) 拙訳, ヒルファディング「仮面を脱いだヒトラー」(同, 第3号, 1988年4月) 原文は, Hitler ohne Maske, in: NV. Nr. 5, 16. 7. 1933.

2, 「経済会議の挫折」

この論説は、ナチズム論それ自体ではないが、彼の認識の発展過程にとって重要なので、極く簡単に考察しておく必要がある。

この副題は「アメリカの実験」である。ヒルファディングは書く。

ロンドン経済会議¹³⁾ —1933年6月2日に行われた、そして7月27日に終わるはずであった—の崩壊は、歴史的な意味がある。その完全な挫折は、危機を新しくし、ブルジョア的解決手段の完全な不可能性を立証する。

信頼を、政治的信頼を作るのは、まず平和の確保による。だが成果がなかったジュネーヴ軍縮会議は、平和努力がユートピアだったと分かった。独裁が戦争の危険を作っているからだ。

ジュネーヴ [会議] の専門家は経済計画を持ち、その解決を広く準備した。まず政治的〔=戦後賠償の〕軽減だった。次に重要なことは、平価問題だった。イギリスは1931年秋に、金ポンドを30%切下げた。同時にオタワ会議¹⁴⁾ でイギリスは保護関税政策に移行した。これで恐慌を緩和した。だがイギリスは、国際的銀行の地位を失った。またアメリカの平価政策と対立した。¹⁵⁾

アメリカは、金本位制を放棄した。これは経済的理由でなく、政治的理由である。アメリカでも中産層〔特に農民〕が資本主義への反抗を起した。それで、手段として金減価による価格暴貴、つまりインフレが残った。アメリカはイギリスの価格暴貴と対抗した。そしてインフレ計画は、大規模な計画経済的実験によって補完される。これは、極く短い期間に経済関係を変えることによる、これまで支配的だったイデオロギーの完全な革命である。この危機を社会主義でなく、国家権力の広範な干渉によって乗り切ろうとする。つまり、過剰生産を止め、工業・鉄道を新しく組織し、強制カルテルを作るのである、また

13) ロンドンで開かれた世界経済会議。66カ国が参加した。

14) 1931年7-8月に開かれた。イギリスが、英帝国ブロック各自治領に特惠関税を与え、こうして英帝国内貿易が拡大することになった。一方、英帝国ブロック以外からの輸入に新関税を掛けた。

15) 塚本健『ナチス経済』東大出版

労働時間を週40時間に、職員は35時間に切り下げ、最低賃金にしてしまう。

会議では、あらゆる国がアメリカのドルの安定化を望んだ。ルーズベルト¹⁶⁾は、平価安定が会議の重要課題だと言ったが、政治的にはこの立場を確保できなかった。安定、国際的信用・貨幣・価格メカニズムを確保する代わりに、会議は、新しい不安定、新しい困難な動揺する危険で、終わった。平価の新秩序が拒否され、会議の第三の大問題である通貨政策の了解は、挫折した。

より一層の展開は、アメリカの実験の経過によっている。だが今、インフレは第一の危機に導いた。¹⁷⁾

3. 「悪化した財政——悪化した経済」

この論説は、前作「財政上の帝国破壊」の直接の継続である。ヒルファディングは言う。

ドイツ経済の貧困が進んでいる。まずそれは、新年度予算の第1・四半期の税収入の結果である。税収入が、90億2600万マルクだった1929/30年の予算以来、下っている。1932/33年の税収入は66億4700マルクであった。大蔵省は形式上均衡させるために、税収入を高め、つまり68億7040マルクに評価した。これは、経済状態の改善が期待されるから、このような高い評価を正当化するという、理由であった。

このような嘘は見え透いている。税収入は、上がらないだけでなく、低落するはずである。ビールは1470万マルク、砂糖は2300万マルク、タバコは780万マルクの下落である。関税は1840万マルク、所得税・交通税は5840万マルク少なくなった。高くなった売上税は、2560万マルクの余剰額を生じ、パーペン¹⁸⁾

16) Franklin Delano Roosevelt (1882-1945). 第32代アメリカ大統領、在職1933-1945。1929年ニューヨーク州知事となり、革新的州政で注目された。この頃すでにニューディールのひな型となる政策を行った。1932年の大統領選挙で、民主党の候補となり、フーヴァー大統領を破る。1933年から大統領。ニューディールと呼ばれる一連の恐慌対策に着手し始めた。

17) Scheitern der Wirtschaftskonferenz. in: *Neuer Vorwärts*, Nr.7, 30. 7. 1933

の塩税は1080万, ヒトラーの脂肪税は1920万マルクを生んだ。

これらの数字はいずれも一つのことを示す。今年の予算が2億2300万マルク余計になるという大蔵省の評価は、事実の経過によって否定されるだけでなく、今年の収入は前年より2億5000万マルク後退するだろう。収入面では5億マルクの損失が計算される。また支出面ではさしあたり偽られていて、どの程度かは予測できない。特に、10月1日には証券税が上がる。それにより著しい部分の納税を納税者が補充する。ヒトラー体制は、税を昔の高さにあげ、中間層を昔の体制の税圧に置くのか？ 他の約束全てを破ったのだ。それは予期されるだろう。だがそれは呪われた冒険になるだろう。しかしそれが中止されれば、紙幣印刷の、つまりインフレーションへの後退以外の出口はもう全く考えられない。

その間ヒトラー独裁は、パーペンの始めた資本家優遇の税政策を続けたし、その成果は、機械やその他の労働対象の償却を無税にしたことである。機械の価格は、それによってその後、完全に年利得から除かれるし、それゆえこの収入部分は無税のままである。その法律ができてから、ドイツ経済状態と、景気にとって決定的で重要な部門の一つ、つまりドイツ機械工業について、驚くような事実を経験する。その売上げは、1928年にはちょうど35億0500万マルクだった。1932年には14億4000万マルク、つまり半分以下に低下した。1928年に国内売上は、24億8000万マルクだったが、続く3年では、22億9000万、17億4000万、12億マルクと低下した。1932年は破局だった、というのは国内売上が7億2000万マルクだった。同時に輸出は、10億2500万から7億2000万マルクに低下した。輸出はいつも国内売行きによりもずっとよかったが。

だが今1933年だが、ヒトラー政府の初めの半年で転換が起きたのか？ 一層の悪化が始まっている。なるほど国内受注は、1932年後半にたいし11%上がった。だが外国受注は、40%以上後退した。だから受注は合計13%後退している。

これが労働市場にどう作用しているか？ 機械業では1913年に60万人の労働

18) Franz von Papen (1879-1969), 1932年にドイツ首相となる。翌年ヒトラーの政権掌握を斡旋した。

者が働いていた。1928年には66万人だった。1933年6月にその数は25万人に下がった！ それに機械業の補助産業・納品産業の労働者を計算に入れねばならない。ここには1928年に19万8千人が働いていた。1933年6月にはたった7万5千人である。それに売上の縮小で生じた貨物運送と商業の低落が加わる。こうして大蔵省の記述が証明するのだが、ドイツ経済のこの部門だけで、55万人の失業を数える。税などの収入源として大蔵省は、1928年には4億マルクと失業扶助2億7500万マルクとをあげている。それは総財政で6億7500万マルクの悪化である！

大蔵省は、国内受注の上昇を1932年度後半に11%と報告している。国内売上が1932年の1年間で7億2000万マルクだけ増えていたので、改善されても3500万から4000万マルクしかない。無税になった新自動車、ゲーリングの航空機、軍需産業へのその他の受注で、モーター産業が向上したにもかかわらずである。

その際ドイツ機械工業協会は、ドイツ経済の正常な償却要領を挙げている、機械の売上げからちょうど70%が償却として落ちる、と。これは年19億マルクだ！ 1932年に償却額はまだ5億3500万マルクしかなかった。それゆえ機械工業の国内売上は、実際殆ど最低限に減少していないことが、結論される。

それに対して輸出が驚くほど後退している。これは単に世界恐慌のせいだけではない。ヒトラーの経済政策の作用でもある。農業生産物の輸入を完全に閉鎖し、例えば獣脂関税が、今年すでに三度目だが、高められた。初めの10ライヒスマルクが100ライヒスマルクになった！ 工業の極端な保護関税欲もちょっと少し前に全部満たされている。こうして関税は、あらゆる糸では倍以上になった。その措置は主にイギリスの輸入に向けられ、もちろんそれがドイツの輸出への対抗措置を呼ぶ。同時にこの糸や半完成品の関税負担は、ドイツの織物業や紐産業の生産費が高まり、その輸出を困難にする。それに対し、外国の競争を排除することによる紡錘業のカルテル化努力は、強力に促進された。

ヒトラーはまさに、あらゆるやり方で独占資本主義を支持している。

他面でボイコット運動が強められている。それはドイツの産業的競争国によ

って、あらゆる手段が使われる。こうして「友好国」イタリアは、目下ドイツに対してボイコットが大きく広がっている地中海や近東の市場で、販路を奪おうとして全力を尽くしている。こうしてチェコスロヴァキアの経済状態の報告で言う、「チェコが、輸出業での国際的ボイコット運動を利用する国になるという印象が強まっている。」

これが、当局の数字と客観的報告から生じるドイツ経済の絵である。ナチは、進展する経済の悪化によって、ドイツ労働者の奴隷化を強めている。¹⁹⁾

4. 「テュッセンは帝国を盗む」

ヒルファディングは、引き続いて論説「テュッセンは帝国を盗む」²⁰⁾を書く。副題は、「重工業資本による帝国の収用——これが『ドイツ社会主義か』？」である。

ヒルファディングは、次のように論ずる。

ナチが約束した有名な身分的な再建が永久に延期された。だがその間、経済組織で、とても広範な変化が行われる事は、妨げられなかった。その変化は、根本的で持続的な社会的権力関係の変化である。この権力の推移は、大変明白である。労働者・職員・役人の組織は完全に死に、中産層の組織も、マヒした。しかし資本家同盟が、構成では変わらず、機能は妨げられず、他の組織を壊して際限なく強くなっている。そして全ての経済問題で今までより制限されず、全体的国家権力を利用している。資本家同盟は、公共経済政策の問題だけでなく、個々の強力な資本家グループの私的利益でも、その力を示している。

また「社会主義者」ヒトラーは、ある人物を、経済問題で最も影響力のある最強の者にした。その男は、遅れた社会政策と、「古い体制」の資本家的狭量さで、評判の悪い、テュッセンである。彼は、国家参事官、最高経済会議会員、

19) Verschlechterte Finanzen—Verschlechterte Wirtschaft, in: NV, Nr. 9, 13. 8. 1933

20) Thyssen bestiehlt das Reich. in: NV. Nr. 10, 20. 8. 1933

このスペリングは、私のヒルファディング著者目録で誤記したので、ここで訂正をしておく。

ライン・ヴェストファーレン〔会社〕の経済指導者として、全ての一般的社会政策・経済政策の問題に、決定的影響力を持っているだけではない。テュッセンは、民間人であり、また鉄鋼連盟の人である。

ブリューニング²¹⁾ 政府のもとで、蔵相デートリヒは、ゲルゼンキルヘン〔会社〕の多数派を、大きな犠牲で国の側に獲得した、同時に鉄鋼連盟の多数派を獲得した。

国が鉱山業一般の「冷たい社会化」をすることで要求した支配的位置は、重工業からは耐えられない干渉だと思われた。だがそれは、鉱山業がブリューニングに反対し、「社会主義者」ヒトラーをあらゆる手段で支持した理由ではなかった。すでにパーペン〔内閣〕のもとでテュッセンは、再民有化つまり国の収奪を要求した、それも無償である、なぜなら彼らは過剰資本を買い戻したくなかったからである。だがその要求はシュライヒャー²²⁾ の抵抗で挫折した。彼は軍事産業の基盤を勝手に利用させたくなかった。それゆえテュッセンは、待たねばならなかった。そして成果なしには待たなかった。ヒトラーが、彼のヒトラーがやってきたのである。

そして今やこの仕事がやれる。無償で帝国を収奪するである。記号がひっくり返った社会主義である。

かつてから資本過剰であった鉄鋼連盟は、急いでその再組織を必要とした。いままでそれはいつも延期されていた。今や第三帝国で、時は来た。鉄鋼連盟は、かつての創業会社ゲルゼンキルヘン、フェニクス、ツェッペン・ヴィッセンと合同するはずである。採り上げられる会社はゲルゼンキルヘンとなるに違いない。ゲルゼンキルヘンの場合は、これまで鉄鋼連盟に多数を入れていた。帝国は、ゲルゼンキルヘンの株式資本のちょうど半分を、つまり1億2500万マルクと、同時に鉄鋼連盟への支配力を持っていた。テュッセンの計画は、鉄鋼

21) Heinrich Brüning (1885-1970), 中央党政治家, 1930年首相, 1934年アメリカに亡命。

22) Kurt von Schleicher (1882-1934), 軍人出身。1932年, パーペン内閣の国防相。同12月首相。1933年に, 辞任。ヒトラーの直前の首相であった。

連盟, フェニクス, ツェッペンを取り込むのに, ゲルゼンキルヘンの資本を約5億マルクに定めようということにある。

こうして一瞬のうちに, また鉄鋼連盟の人々が1銭も出さずに, 帝国の多数の支配の持ち分は, 無意味な少数に転化するだろう。再民有化は実行され, テュッセンの支配する影響力は再び確立し, それに帝国の1億2500マルクは, 健全化資本として横領される。これはきわめて恥ずかし気もない強奪である。これを近代のヨーロッパで, 資本家の徒党が計画したのだ。

今や, ナチ革命の真の本性がわかるか? なぜヒトラーが革命を終わらせると声明したかが, 分かるか? なぜ新聞がドイツで, 政治だけでなく経済の問題でも完全に口を閉ざされているか, 理解できるか? ドイツの新聞が, 共通財産のこの資本家横領を批判することができないほど, 特徴的なものはない。

テュッセンは, ヒトラーに数十万マルクも資金援助した。彼の仕事は返報を受けた。彼は千マルクについて百万マルク戻して貰った。確かにこの男には「ハイル・ヒトラー」というのは心からのものである。

しかし歴史は弁証法的過程で実現される。この資本家的収奪は, ドイツ労働者階級の政治的収奪により, 彼らの政治的組織的自由の強奪によってのみ, 可能である。だから自由を再び獲得するのは, 今の収奪者を無償で強制収用することであり, 社会主義社会を建設する第一歩としてのそれである。

5. 「遅いテンポ」

次に, ヒルファディングは, 同じ『ノイエル・フォルヴェルツ』に, 文字通りには「蝸の速さ」²³⁾ という題の論説を載せる。

この論説の副題は, 「それは雇用創出と呼ばれる」である。この雇用創出(Arbeitsbeschaffung)とは, 今の言葉では失業対策であるから, 以下, そのようにいう。

ヒルファディングは論ずる。

23) Schneckentempo. in: NV, nr. 12, 3. 9. 1933

ナチの山師たちは、失業対策について騒がしく活動している。その範囲、その資金は、素晴らしい。100万マルクの計画だの、10億マルクの額とかが報告されている、だがそれは計画だけであって、実行されるわけではない。

すでに1933年の初めに、公共的失業対策は、12億8200万ライヒスマルクが承認された。そのうち3億4200万は、ブリューニング・パーペン両首相の時代の計画であった。2億8千万が国鉄、6千万が郵便、6億が証券税のためであった。この12億8200万は、大部分がすでに1年前に承認されていたのだが、4億4400万だけが今まで実際に使用された。帝国財政と失業保険の資金を含めても、公共的失業対策の全費用は、5～6億マルクを越えていない。それにこの大部分がまだヒトラー以前の旧体制の計画であった。第三帝国の会計は、ゆっくりと、欠陥だらけでしか、実行されていない。

この急転回〔＝ナチの政権獲得〕以来、何が起きたのか？ ヒトラーの宣伝の核心である新しい10億マルクは、どうなったのか？

その配分についても、今まで一つの計画以上のものはない。

たとえ急いでも、多くの計画が開始されるのは、この秋である。事業は冬には中止されねばならない。失業はまた上がるだろう。

ホラを吹いて膨らました10億マルクは、せいぜい今まででも、5億が実行されている。その原因は、始動が難しいとか官僚の妨害にあるのではない。主な困難は、資金の欠如である。

帝国の金庫はカラであり、州、市町村もそうだ。

貧者の外見上の需要充足、つまり失業対策、これは簡単で最善で最も素早い形だが、これが資金欠乏のために延期されると報じられた。

だが、秋には今までよりも金は少なくなるだろう。税収入が引き続き低下しているのだ。

大規模な失業対策は、十分な資金がなければできない。だが第三帝国の主人たちは、大資産への課税や、借款を考えていない。だから空手形しか残っていない。

新しい貨幣は作られる。しかしそれは以前とは反対に、印刷されるのではな

く、書かれる [つまり、手形が振出される]。

しかしライヒスバンク [=帝国銀行] は、手形の換金には、ついに紙幣印刷を用いるしかない。ライヒスバンクは、わけがあって経済破産を心配している。

これまですでに引き受けた責任は、途方もないものだった。失業対策への転換を保障しなければならなかった。それ以外にも、証券税、東部援助、恐慌期の信用貸し、ロシア為替の資金、その他の多くがある。これらすべての財政的責任を引き受けるには、50億マルク以上になる。この額は、支払い手段の総流通と同じ量である。この軽々しい金融によって、インフレーションの危機が一層近づく。

この恐れからライヒスバンクは、失業対策をゆっくりしようとして、あらゆる事を行う。それに成功したのである。

これは、大変なねばり強さで行われる秘密裡の闘争である。思慮のないデマゴグとライヒスバンクとの間で、荒れる。前者は、約束した経済の改善を、財政的には最も危険な方法で、行うとする。そしてライヒスバンクは、為替が毎日もっと危なくなると思う。そこで抵抗の最も少ない所、つまり失業者の負担で、新しいインフレーションに反対するほとんど展望のない闘いをするのである。

彼らは、所有者の犠牲、帝国資産の売り渡し、強制借款を、望まない。かかる干渉は、資本主義の本質と矛盾するし、「ドイツ社会主義」の原理とも矛盾する！ それゆえ失業対策は、ゆっくりと前進するだけだろう。しかしインフレーションは、ついに避けられないだろう。

6, 「労働者に反対する戦い」

ヒルファティグは、引き続き、論説「労働者に反対する戦い」²⁴⁾ を書く。これは翻訳しておこう。

「指導者原理」, それをナチスは経済で素早く完全に実現してしまうだろう！

24) Die Schlacht gegen die Arbeiter. in: NV, Nr.13, 10. 9. 1933.

労働組合を鎮静化し、ナチス経営細胞を抑制して、企業家は、あるやり方によって自分の家の主人になった。最も反動的な尖鋭家もあえて望まなかったようであった。最大のヨーロッパ工業国〔＝ドイツ〕で、労働者にはもはや労働権がない。労働者層は、政治的にだけでなく、社会権利上も、およそ1830年〔の時〕の身分に、初期資本主義の時代に、戻された。

ヒトラーの権力掌握からほとんど半年以上経っていないのに、この無権利化がいかにして貧困化に変わる傾向があるかが、すでに明らかに示されている。賃金率協約は、公式にはさしあたり効力がある。しかし、生活維持費用、とくに獣脂のような重要な商品の騰貴は、実質賃金を一般的に下げる。価格騰貴は、他の領域、例えば繊維業でも強まっている。なぜならナチスの経済政策は、直接にカルテルの要求に合わせられており、価格値上げは、経済の活気の標章として歓迎されている。名目賃金が同じままだということは、購買力の縮小である。

まだ別の事がある。賃金率協定は、紙の上だけにだけあるのではない、だからその厳守は、労働組合によって常に管理されるはずである。この監視は今中止している。個々の労働者は、今やその権利が侵害されて、ほとんど無力になっている。「労働戦線」²⁵⁾は労働組合が廃止された形態そのものだが、組合のない状態が長ければ長いほど、それだけ一層、賃金協定は骨抜きになり、回避されるだろう。だが残酷な皮肉はこうだ、労働者が、失業に対する措置によって、今最もいじめられている。もちろん、40時間労働に一般的に短縮することが、賃金切下げとなっている、その減った労働の賃金対価が支払われないからである。そして賃金税が復活したので、それによっていつも多数の労働者層の収入が、

1ヶ月100マルクの生存最低の税以下に押し下げられる。

労働者が失業した兄弟と連帯する行為として本来考えられたものは、資本主義的尖鋭分子とナチスの猟官との同盟によって、全労働者階級を苦しめる悪魔

25) ドイツ労働戦線。労働組合に代わって、ナチスの労働組織として登場した。その長官はロベルト・ライであり、大酒飲みで知られた。

のような手段になる。どこでもあの有名な「労働の闘い」、つまり失業者への闘いが、ナチのサディズムの胸のむかつく特徴をもって、労働者への本当の闘いになっている。

体制が進むのが、ますます明らかになっている。第一段階で、マルクス主義的労働者は、尖鋭分子と猟官者の同盟で、ナチスと未組織労働者によってきわめて広範囲に、置き換えられた。²⁶⁾〔第二に、〕同様に操業短縮によって空いた地位がこの人々のために保留された。さて第三段階として、労働局や自治体の福祉事業の官僚が、同盟して尖鋭分子や猟官者に加わる。彼らは同様にまさにナチスに指導されている。今や新種の人狩りが始まった。追う人は、まず自治体の官僚であった。

自治体は破産している、

そしてこの破産は日々強まっている。〔9月の〕ニュルンベルクの党大会で、ベルリンの国家委員ドクトル・リップルトは、すでに公式にこう認めた。事実上の破産を全く公に声明し、帝国の一般的な強制的な利子低下をする他はない、と。なぜならば、市町村は、働ける失業者のきっかり3分の2を、貧民救済の原理に従って要救済貧民として保護しなければならないから。再三発表される組織的・財政的な失業対策の新事業は、これまで出来なかったと。リップルトは、失業者に対する闘いを将来にわたっては明らかに余り多くを約束しなかったので、市町村の負担軽減を債権者の犠牲で行うことさえ要求した。

すでにプロイセンの大都市で、初めて支払い不能が起きた。ドルトムント〔市〕は、すべての財政措置を決める債権管理者のもとに置かれねばならない。

26) すでに1933年4月7日に、職業官吏階級再建のための法律ができた。それは、政治的あるいは人種的な理由から、その地位にふさわしくない全ての官吏を罷免する権限を、ヒトラー政府に与えた。そのふさわしくない場合は、以下の四点である。

- 1, 共産党あるいは共産党の支援組織の成員であった場合。
- 2, 将来のマルクシズム、つまり社会民主主義あるいは共産主義の活動をすると思われる場合〔——ここでヒトラー政府がそう思うことに注意〕。
- 3, これまでの活動から見て、いつでも国民国家〔=つまりナチ国家〕のために喜んで働くとは思えない場合。
- 4, アーリアン人種の血統ではない場合。

その債権管理者は、すべての債権者を同様に満足させて配慮しなければならない。そして給料と福祉支出を確保した後、都市の独自資産を処分できる。それは確かにあらゆる公共経済の敵には大きな満足である。ドルトムントを押しつぶすのは、福祉負担である。利子切下げは、ドルトムントのような工業都市を何も助けない。なぜなら、たとえあらゆる負債が抹消されようとも、ドルトムントは1200万マルクの赤字をいつも残している。福祉負担を低くするか、農村へ〔人を〕帰すしか残っていない！

この圧力の下で福祉官僚は、失業者扶助を貧民救済事業に転化し、それを悪化するだけではない、途方もない強制で、扶助の引き延ばしで、強制収容所で脅かして、

都市の、一部は技能労働者と職員を、農村で強制労働をさせ、あるいは労働奉仕収容所に移送しようと試みている。だが帝国労働局の官僚は、自治体のこの「労働の闘い」を計画して起こした。自治体が、長期の無所得者を世話するのが負担となり、捨ててしまおうとし、労働局は保険と恐慌対策で扶助した人を見捨てようとした。その際どの様に経過したかは、オスナブリュックの労働局の公式通知が示している。

「大きな労働の闘いで明らかになったのであるが、多数の扶助受給者があらゆる口実をもうけて、彼らに割り当てられた労働を拒否している。労働局は、あらゆる場合に扶助を閉じる。それ以外に、労働拒否や労働嫌悪が証明できた場合、悪しき怠惰者は、強制収容所に移され、それによって彼らは規律に慣らされる、ということになる。昨日この種の初めての扶助受給者が出た、オスナブリュックのH・Mなる者である。彼は強制収容所へ移されるよう政府に任された。」

分かっているのだが、強制収容所は、第三帝国では政治的機能だけでなく、社会的機能も大いに満たしている。

だがそれにも拘らず、まだ不十分である！ 一層大きな範囲で労働者を労働から投げ出し、扶助資格を否認し、その代わりにそれまでの被扶助者を置き換えようとする。それに役立つのが「二重所得者」という概念の諮意的な解説で

ある。二重所得には、一人の人の活動が同時に二度支払われることだけでなく、夫と妻の同時の職業活動だけではなく、多数の家族員の職業活動も妥当する。だから例えば、多くの家族員が収入を得ているとすると、家族員は全家族の生存が脅かされないならば、退職させられることになる。この労働市場政策は、いま西の工業領域で実施されている。なぜなら、ヴェストファーレン地方労働局長官と合意して、雇用者同盟は、テュッセンの命令でこの根本原理を採り入れなければならなかった。

退職者は、扶助を貰えない。

編入されるのは、扶助を受ける無収入者だけであり、その際、明確に言われたように、番号1から10万のナチ党の黨員とSS、SA²⁷⁾と鉄兜団の成員が優先される。そして退職者には何が起きたか？ 彼らはその家族によって扶養される。労働局は、扶養を節約し、社会予算は軽減され、テュッセン氏は、彼が知っている「耐えられない」税圧を軽減したいと思っている。退職者の扶養のために、最後の予備が、労働者層の最後の貯金が引き出される。なにしろヴェストファーレン州長官ドクター・オルデマンが言うのだが、「節約資本の形成 [=貯金のこと] をやめるべきであり、今労働をしないでいる成員は養われるべき」だから。もしも節約資本が——恐慌の4年間で——なかったら？ その時彼らはまさに飢えるにちがいない！ なぜならドクター・ライによれば、社会主義とは、犠牲を厭わないものだから。

労働者が[ワイマール]共和国で政治・社会的権利を持っていたときに、ブルジョアジーからもぎ取り、いつも厳しく闘った失業扶助体制は、重要な成果であった。それは、失業者自身をととてもひどい貧困から守っただけでなく、労働組合の地位を労働市場で保ち、また闘い取った労働条件を保った。まず労働権が崩壊し、自治体行政に対する政治的影響力が奪われたことで、次のことが可能になった、つまり生活を維持する手段が労働者を弱らせ奴隷化する手段になった、そして労働の闘いつまり第三帝国では失業者に対する闘いが、労働者

27) SSは、ナチス親衛隊、SAはナチス突撃隊の略称。

にたいする戦いと失業者に対する闘いとなったのである。

ドクター・リヒャルト・ケルン

むすび

ヒルファディングは、論文「経営内の奴隷制」で、ナチズムを独占資本主義と見る。しかしこれだけでは不十分であろう。だがこの論説では、それに限らない諸現象を、実際には描いている。そして彼は後に、政治の経済からの相対的独自性をつかむことになる。とりわけそれを「歴史的諸問題」²⁸⁾で理論化する。

「仮面を脱いだヒトラー」では、ヒトラーが社会主義的変革をやらないことを示した。ヒトラー自身は、口先では社会主義的変革を唱えていた。

ヒトラーが社会主義的変革をやらないことは、現在では余りにも当り前のように思われている。だが、当時は、ヒトラーが社会主義的変革を行うものと思っていた人が多かった。なぜならナチ党というのは、党名にあるように、「社会主義」を目指す党と思われていたからである。その上、政権を奪う前のナチは、反資本主義を標榜していた。

実はヒトラーの社会主義は、独特のものであり、彼の理想はドイツ民族の共同体であった。この論説では、ヒトラーの裏切りを述べる。

「経済会議の挫折」では、アメリカの実験に注目している。つまりルーズヴェルトの新政策である。しかしヒルファディングは、これがうまく行かないだろうという展望を持っている。

「悪化した財政」では、当時の新聞が政府の発表した財政的數字に惑わされており、それを批判する形で、本当のドイツ経済の財政の姿を描こうとする。

1920年のナチス党綱領で、ヒトラーは、労働と骨折りを伴わない所得の廃絶と利子奴隷制の打破を約束した。このアイディアは、おそらく変人経済学者で夢想家のゴットフリート・フェーダーのものである。

28) 「歴史の問題」(前掲『R・ヒルファディング 現代資本主義論』所収)

ナチスは、国外・国内取引、労働市場・生産計画、重工業、手工業・農業を含む、厳密に中央集権化された経済によって、経済的混乱を解決しなければならないとした。つまり表面を見れば、文字通り、社会主義であった。それにヒトラーは、労働者の友、と名乗った。

これらは、ナチの党名つまり国民社会主義ドイツ労働者党にそむかないものである。ナチ党は、その綱領から分かるように、労働者の党であり、社会主義の党であると思われた。ナチ党の中にも、そう思っている人々がいた。そして政権掌握前に、ナチスは、共産党と一緒にストをしたこともある。ナチをやめて共産党に入った人、共産党をやめてナチスに入った人もいる。選挙で労働者は、ナチスに入れようか、共産党に投票しようかと迷った人もいた。ナチも共産党も同じく、ヴェルサイユ条約反対、資本主義反対を、掲げた。

だがヒトラーが政権を取る前に大企業と接触し、軍備を約束して、膨大な政治資金を貰っていたことを国民一般は知らなかった。1933年の政権掌握前に、ナチは、全ての人に全てを、誰にも何でも、約束した。

共産党、つまりコミンテルンは、ナチをしっかりと認識できなかった。社会民主党もそうである。

そして注意すべきは、当時のドイツ労働者や国民の政治意識である。ドイツ国民が先進ヨーロッパ諸国に比べて政治的にいくら遅れていたとはいえ、1918年にドイツ革命を経験し、カイゼルトゥームを倒し、ワイマール共和制を実現したのである。社会民主党も、単独で、あるいは連立で内閣を作ってきたのであり、労働者の政治意識も低くはなかった。

従ってナチスは進歩的ポーズを取る必要があった。それが国民を騙した。

ナチスの真の姿は、人々に認識されなかった。ヒトラーの反ユダヤ主義は、それほどひどいとは思われなかった。残虐なホロコースト、強制収容所は、ナチの没落後やっと、ドイツ国民と世界に広く知れ渡ったものである。

ファシズムはすでにイタリアで登場していた。しかし、その最も極端な形となるドイツ・ナチズムは、政権についたばかりであった。ファシズムやナチズムは、人類世界の歴史では、いまだかつて人々が経験したことの無い新しい現

象であった。人間はそれほど利口ではないから、この新しいビヒモスが一体なんであるかは、分からなかったのである。

そのような状況の中で、ヒルファディングの諸論説は、現在から見ても、古くないし、その上、当時の最も素晴らしい文献・資料ともなる。また、ドイツ社会民主党の中で、彼は早くからナチズムを批判した人物である²⁹⁾。そして当時の中であって、その批判の的確さと新しさをどうして持ちえたのだろうかと思うほど、彼の論説は、まだまだ斬新である。

29) *Nationalsozialismus und Marxismus*, 1932